

## 徳山近隣の霊場

会員 渡 辺 勝

まえがき

徳山新四国八八カ所の概要について本会誌第10・11号に報告した。その調査検討にあたり他の霊場を見聞しておくことが、貴重な参考となるので近隣の霊場も並行して調査した。その若干について概要をのべることとする。調査は必ずしも十分ではないが、これらの施主が現存者の親だとか伯父叔母だとか近所の人だとかいうことがかなりあると思われたので、早く報告しこれら系累者がぜひお詣りされることを願うものである。

その1 千日寺霊場(第1・2・4図)

遠石の旧道筋を遠石八幡宮の境内にはいるとすぐ右側に折れ小さい石橋を渡ると、石柱が立っている。右側には「福寿庵西国卅三番札所」裏側「寄附トイン明石末松」、左の柱には「千日寺四国八拾八ヶ所札處」裏側「施主石匠武

田道助」と陰刻してある。これから石段を登ると俗にいう千日寺である。寺の前広場には沢山の石仏が整列している。これを逐一調べて分類すると次のようになる。

- 1 八八カ所第一系列
- 2 八八カ所第二系列
- 3 三三観音
- 4 その他まとまりのないもの

この寺は天正・文禄の頃の建立と伝えられその後の経緯は省くが、文献類には千日寺或いは千日庵と記されており、山口県風土誌には「阿弥陀堂 元千日寺の古跡なり 遠石無量寺受持」とある。時代が下がった現在でも千日寺で通用していて毎月一四日には有志による法要が行われている。

数人の古老によると、裏山には昭和初期まで相撲場があったり、一面のハイ松・桜等で徳山の行楽地として季節には

大変賑わったという。そして千日寺北側から山頂にかけ葛折りに八八カ所（二枚板型 本会誌第10号「徳山新四国八八カ所について」第2図参照）等が配列してあり、頂上には三権現祠が祀ってあったという。ところが昭和三〇年後半期に山は掘り取られ、石仏は山上から千日寺前へ下し山積されていた。それを昭和五六年に河村理助・国本智妙氏等有志により、供養され千日寺前広場へ整列されたものである（それまで工事中シャベル事故が頻発したという）。

さて拙著会誌第11号「徳山新四国八八カ所について」の第5図の三大権現祠に刻字してある千日山とはどこであろうか。千日山の名は三大権現祠の刻字及び「徳山藩 大令録」の……遠石千日寺後抱山……の記事、古老談と考え合わせ千日寺裏山であることに間違いない。

千日を地名に使っている所は、防府市千日（元千日原墓地）・大阪市千日前（法善寺が千日念仏回向をするので千日寺の別名で呼ばれた）等がある。千日詣・千日行を成就の行事といわれていることから、遠石千日寺も何かを千日回向をし宿願成就を願う処という意味であろうか、或いは遠石八幡宮の二の鳥居に「奉寄附 石鳥居 宿願成就所 享保十一年」の刻字と関係があるのであろうか（遠石別宮之縁起によると「信心を凝して一度此山に登る者は所願

成就せずと云事なし」ともあるが）。

#### 1 八八カ所第一系列

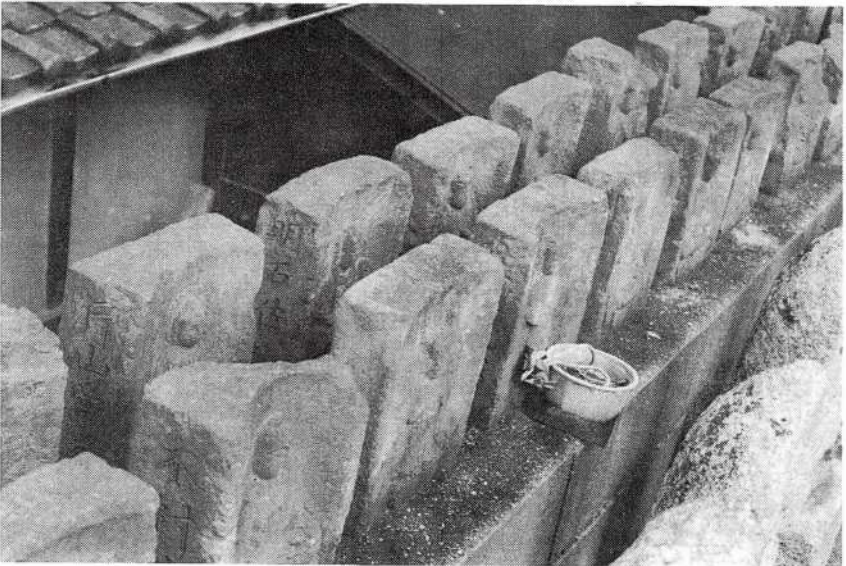
型式は二枚板型が原形であるが、殆ど前板・屋根及び台座（台石）が失われた姿で整列されている。総高約60cm。（第4図【及び▲】の二個が該当）

この石仏の設置年を刻氏名（筆跡一致）を頼りに調査した。刻氏名で没年がはっきりしたものは木村丈吉M15・内田新吉M17・榎谷卯兵エM18・石川政右エ門M19・住谷光蔵M40・住谷与吉M45・水木京助T3・明石佐助T5・宮崎栄吉T13・温品暢造T3・内田広吉T10等である。即ち墓石の調査並びにこの人達のご子孫を探し求め、墓石刻年・位牌・古文書家譜等から没年を求めた。その結果最も古い没年は前述の通り木村丈吉M15である。従ってM10代の勸請としてよいであろうと推定された。ところが温品暢造寄進の祠に寸法その他が一致する石片（前板？）を別に発見し、これには「明治十一寅三月廿一日」と彫られているから恐らくこの年であろう。尚この系列の一部が徳山市中に移され祀られている（本会誌第10号P42 第1表 二枚板型が該当）。

この系列の石祠の内特に目立つのが温品暢造（注1・2）寄進のものである（総高約1m 安山岩製）。温品家は遠



千日寺靈場



千日寺靈場第1系列

石で古くから屋号を二葉屋といい文政頃には既に、酒造業を営み大正頃迄続いている。本家はかの櫛浜の堀川運河工事を実行した栗屋村温品孫四郎家である。

次に施主に「宮嶋小梅」というのがある。防長新聞（明治一八年四月四日）に

◎遠石の晩景 遠石ハ古来有名の遊廓にして一時は下の関と東西相競ひ長府の馬関徳山の遠石とて両支藩の楽士の如く言ひなし徳山より東一里許の所にありて中を隔つる松原ハ土手八丁の心地して徳山の御家中も潜かに御通ひなされ其外熊毛都濃両郡内にて年々幾何の家を傾け何程の田地を没したるか素より数へ難かるへし御維新以後一時衰頽の姿ありしも再び芽を出し明治八九年より四五年間小今、お來、小梅、小松等芸貌兼備の芸者輩出し芸妓も四五十人の間にありて益幸、塚口屋、磯又、風月樓の四樓は夜々客満ち昼夜弦声を絶たず試に一日の収入を算すれば蓋し千円にも達せしなるべし然るに今や昔の様の影ざに残さず風月樓の障子は破れて無人の家の如く塚口亭も常に閉して昼猶夜かと思へる益幸樓の欄干には洗濯したる裡木綿を乾かし磯又樓の屋瓦ニは茫茫草を生ず芸妓は僅に十三名その半は毎夜お茶を挽き衣服ハ大概廻り裡にて半線香連も皆唐幽禪を着し外を行くに足袋を穿

ず夜に入ると球燈を掲ぐる楼もなく又絶へて弦声なく夜色沈々只犬の遠吠を聞のみ哀れと云うも愚なり同地の人より投書の儘」と遠石の衰微ぶりを報じている。施主の一人の「宮嶋小梅」とはこの芸貌兼備の小梅ではなからうか。年代も一致している（明治一一年頃の遠石及び「榊幸」の写真は、「徳山市史」下 昭和三五年刊 一九・一二〇頁参照）。（第1図）。

注1 暢造は分家三代目で、徳山八八カ所七一番には施主 遠石温品家とあるから暢造の先或いは先々代の寄進であろう。暢造の子為造は遠石沖の三味線網・合田（現在の沖見町）海岸の海苔筭及び牡蛎筭免許を持ち、二葉屋開作に魚市場を開設している。又明治三三年頃には徳山村（のち町）会議員であった。

注2 国広喜左衛門が天明四年頃、後の二葉屋開作の理立許可願を出し、又文化三年下松浦高州屋某も築造願を出したというが、徳山藩と萩藩との利害関係の為か手続きの繁雑さの為か実行に至らなかつたらしい。温品暢造は自己全財産を傾けても完遂の決心で、萩に赴けこと実に七十余回、遂に了解をとりつけ捨石工事にかかる。そして明治九年三月から本格工事、一四年一月潮留かくて同六月初めて田植えをしたという。

## 2 八八カ所第二系列

型式は光背型本尊半肉彫又は大師丸彫像。花崗岩製（第4図の◇・○印）の内観音の刻のないもの昭和十一年が該当）。総高約60cm。

この石仏も前述のように無造作に山積みされていたものを適宜整理したものであるから、仏身と台座との組合わせは作業状況からして原形に復元できず、取り違えられた公算極めて大であるし欠番もある。

施主には遠石 松本良一・国広幸彦母・橋本町 山門舛二郎・トイシ 渡辺達次郎・河村理助・オノ森 国広ラク等々が刻されている（遠石八幡宮一ノ鳥居はラクの兄国広藤太郎の寄進。第2図）。

勧請の発起については本会誌第11号拙筆「岩井勝次郎翁の菩提塔について」四 菩提塔寄進の動機と時期 を参照して戴きたい。尚参道の石柱もおそらくこれと同時に建立されたのではなからうか。というのは石匠武田道助は千日寺のすぐ下に住む石工で昭和十五年五四才で没しており石質も一致しているからである。

ここで気になることは千日寺南側にある三権現祠である（第2図16花崗岩製）。年号が入っていないので建立年ははっきりしない（施主の一人岩本甚吉について、遠石にあった

岩本数家を探し求めたが遂に系累を発見できなかった）

がおそらく第二系列と同じであろう。遠石の本会員渡辺義一氏によればかつて千日寺八八カ所の頂上に安置されていたという。他の霊場の例でも八八カ所に三権現祠を祀る場合、大抵順路の中央高所に配されている。特にこの権現祠で注意したいことは三権現名とその配置が、徳山八八カ所と一致していることである。ということとは第二系列を勧請する時、古には徳山八八カ所がここにあったことを知っている人達がそれを踏襲するという意味で同じにしたか、あるいはただ単に近くの（ごく近くには久米慈福寺裏山にもあるにもかかわらず）例に倣つただけであろうか。興味が持たれる点である（三権現と八八カ所との関係については本会誌第11号「徳山新四国八八カ所について」(五)決定的祠文の発見の項参照）。

ここで特記しておきたいことは、八八カ所の一つ「第七十二番 徳山市オノ森 国広ラク 亥年女」が遠石八幡宮の境内に倒れたまゝあることである。この人は第一号も寄進していて熱心な信仰者だったのであるうか。この石仏も放置せず整列されたいものである。

## 3 三三観音

仏身は光背型本尊観音薄肉彫花崗岩製。台座には番数・

観音名・寄進者名及び住所・寄進年等を陰刻してある。総高約85cm区々。(第4図の○・◇印の内観音名のあるもの昭和一一年が該当)

この内一際目立つ三体の石仏がある。それは第十二・十八・廿三番で施主は各々徳山屈指の事業家の河村秀吉・宇部津協勘市・宇部松重善兵衛氏である。台座側面には各々「為菩提最勝院大徹無為居士」と陰刻されている。徳山の事業家河村秀吉氏が菩提を弔うような人とは誰であろうか。その人は興元寺のご協力により徳山発展の貢献者 岩井勝次郎翁であることがわかった(勸請の動機及び岩井勝次郎翁と三氏にまつわる事柄については本会誌第11号「岩井勝次郎翁の菩提塔について」P45・46参照)

ここで思いつくことはこの寺は千日寺で通用しているが、正確には福寿庵ではなかったかということである。というのは入口の石柱に「福寿庵西国卅三番札所」とあり、整列した石仏の内に「福寿海無量 千山白雲禪定尼………」(本会誌第11号「前出」P47参照)と刻した大型の石仏があるからである。

#### 4 その他

単体丸彫像・光背型・板碑型・石質・書体等まよりのつきにくいものである。年号は安永・文化・昭和一四年迄

と幅が広く不明のものも又多い。

気づくものとして「早乙女碑 昭和丙子(昭和一一)師走 施主 松本静子」がある。これは旧山陽道が遠石から久米地区への峠の西側裾(現在の五月町藤井内科前)にあつたという早乙女松(「防長地下上申」には「一、苗打松久米ヶ後ニ有之 但先年急之御飛脚へ五月女苗を打候て被伐殺、右之所へ葬塚印にて御座候ニ付、苗打松と申候由地下人申候候事」とある。又古老は「早乙女が急使に切られ、供養の為庵を結び千日供養をしたので千日庵という」と早乙女伝説を伝えている)の傍らにあつたものでかつての県議松本良一氏夫人静子によって設けられた。しかしその後の変貌と共に即ち昭和一一年から始まった海軍燃料廠の大迫田貯油タンク工事その他のためであろうか引越さざるを得なくなった。次に徳山八八カ所の第五十・七十一・七十八番祠がある。これらもこうならざるを得ない事情を担ってきたのであろう。特に七十一番には「遠石 温品家」と陰刻してあるから、徳山八八カ所を市内へ配置したとき温品家(梅花川東岸下にあつたという)へ祀ったのであろうが、温品家立ち退きの後持込まれたものとされる(前出八八カ所第一系列の項参照)。

又徳山西国三三観音(徳山旧市内配置、約八〇%把握)

第四番の台座とみられるもの、六角供養塔（徳山→新南陽配置、約八〇％把握）第十二・廿五番もある。

思うに太平洋戦争→戦後の急激な工業地化・市街化の波に各地各所から様々な理由によって、この無住の寺へいつの間にか持込まれてきたのであろう。つまり世相の変化と共に吹き寄せられた仏といえるであろう。

## その2 常禱院霊場（第3・5図）

徳山動物園の北側の名利常禱院の一面に新四国八八カ所がある。勿論八八カ所以外の石仏も若干併記されている。

この八八カ所は旧常禱院の周囲（現在の動物園の北半部）に配置されていたが、空襲により散乱していたものを現在のように移転整頓されたのである。

常禱院は弘仁年間（八一〇）弘法大師の草創によるとされ、大内・毛利氏の元で遍照寺・常禱院と世の常の如く興廃幾変遷をくり返している。しかしこの八八カ所は動機も勧請もはっきりしている。

霊場には記念碑があり、発起者・年月が刻されている。即ち「東宮殿下成婚記念 八十八ヶ建設 大正十三年五月二十日」と陰刻されている。大正一三年一月二六日時の皇太子裕仁親王（昭和天皇）と久邇宮良子女王との成婚が発

表されているから急遽実行されたのであろう。

型式を分類してみると

光背型本尊厚肉彫（仏身＋台座） 第5図◇印

大師丸彫像（仏身＋中座＋台座） 第5図○印

となる。総数一一四基この内光背型は88番迄欠番もなく完全に揃っているが、丸彫像のものは欠番が多い。これはおそらく欠失して欠番となったのではなく寄進希望数だけ建立したものであろう。

この霊場を調査してやりがいのあることは、勧請が新しただけに寄進者の住所氏名がはっきりしているし、現存者が知っている人が多くあることである。筆者も心当りを尋ねてみて知人系累を探しあて紹介した例が数件ある。寄進者は東は横浜・梶島（五基）、遠石からはない。辻・舞車・風呂迫・一ノ三番丁・中ノ丁・本丁・岡田原・今宿、東松原・橋本町・糺町・東浜崎町・東ノ西船町・西町・合田町・野上町・戒町・沖ノ丁・西松原・オノ森、周辺地区では浦山・水上・川曲・江口・新地、遠くは福川から六基寄進されているが、徳山旧市内の中心部からはない（油屋丁の一基を除き）。珍らしいことは常禱院八八カ所と千日寺双方に寄進した次の方があった。

藤村カツ 常禱院二十番 トク山橋本町



常 禱 院 靈 場

千日寺？番  
藤田ハツ 常禱院八八カ所世話人

千日寺？番

この二人は橋本町に住む姉妹で千日寺には同一基に並記してある。又非常に熱心な大師信仰者であったのであろう。遺族を八方探したが遂に求めえなかった誠に残念である。

会 員 短 信

「徳山新四国八八カ所」

「徳山藩重臣家譜」を發刊

この程本会會員渡辺勝氏が題記を發刊。前者は本会誌第10・11号に簡単に紹介した原本で徳山八八カ所を詳しく説明すると共にこれ迄の先人観や常識的なものと地方史研究の史観との注意点を示唆してある。後者は徳山藩の重臣（粟屋・奈土屋・福岡・鳥羽・森・富山・杉山）の家譜と、特記したいことは藩初め前後の人事記録が添付されており、本会名誉會長神本正律氏の校訂提供されたもの。徳山史研究に恰好の史料。



第1図

徳山遠石千日寺付近



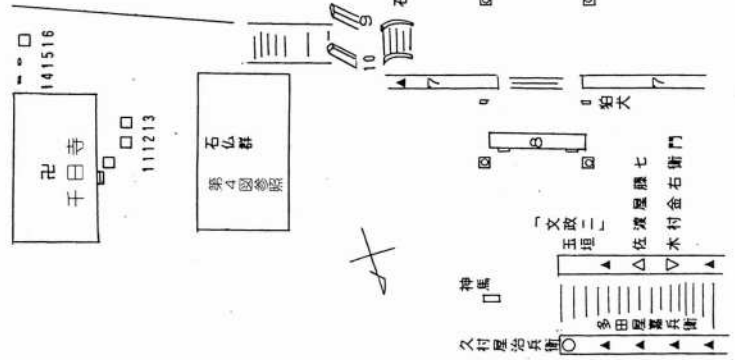
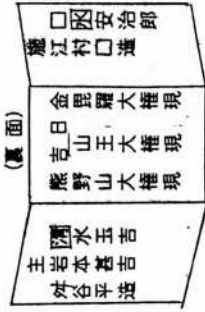
昭和4~7年当時?  
平成元年5月 波辺義一氏作成



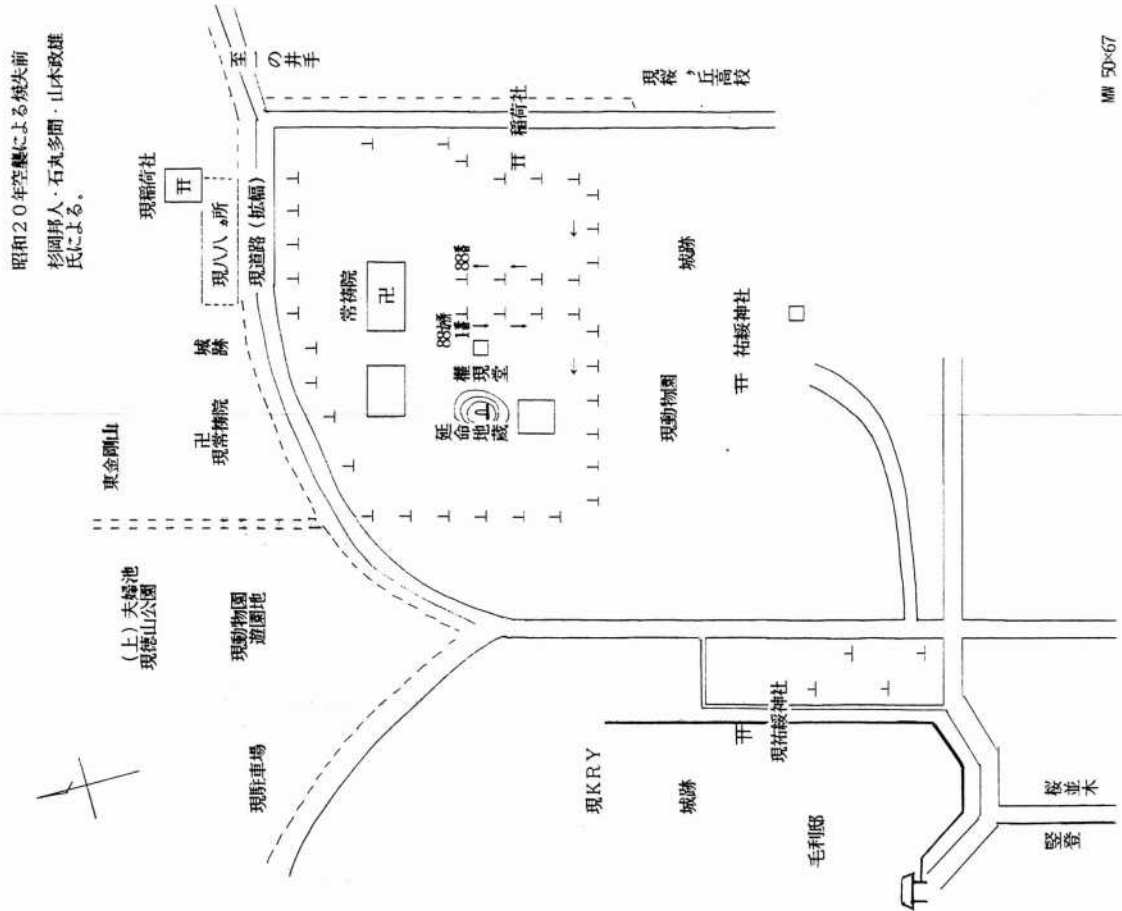
※ 三ッ石 お祭りの時、御神輿の鎮座する処

第2図 千日寺  
遠石八幡宮参道  
配置図

- 1 大燈籠 「木村栄助直清 宮崎勝之丞彰常 久村卯兵衛敬義 弘化三」
- 2 五垣 「徳山橋本丁」各屋号、「徳山桃町」各屋号「文化三」
- 3 鳥居 「国広藤太郎 昭和二」
- 4 石碑 (龜鉄) 「根社 明治十二 願主東附即加藤新蔵」
- 5 灯籠 「住谷富蔵 大正十三」
- 6 灯籠 「米武和田 出尾藤吉 明治二十」
- 7 玉垣 「和田利右衛門平盛房 寛永六」
- 8 鳥居 「幸寄附石鳥居宿願成就所 享保十一」
- 9 石柱 「橋考庵西国卅三番札所」
- 10 石柱 「裏面「寄附団」明石米松」  
「千日寺四国八拾八ヶ所札所」
- 11 水船 「裏面「施主石匠武田道助」  
「施主久村口口世話人住谷口口」  
「木口口 明治四二」
- 12 地藏石像
- 13 不動明王石像「火防 文化元」
- 14 墓石 「口口口信女」
- 15 墓石 「園菅良園 享保十九」
- 16 三種現桐  
摩訶闍梨



第3図 徳山城跡常禰院付近図



MM 50x67



【木】京助※	【時】村松治良	八竹 徳山	観音	昭和一十	○大師	※	観世音 昭和一十	○大師	第八番 昭和一十四
【時】清※	【〇〇〇〇】殿※	六廿 土田〇〇	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第四番 昭和一十
【〇〇〇〇】常高※	【〇〇〇〇】吉高※	第三十二番 昭和一十五	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第四十一番 昭和一十
【〇〇〇〇〇〇】※	【橋本】實代殿	徳山 河島政雄	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第五十一番 昭和一十
【〇】城取五良	【〇〇〇〇】柳殿※	第五十九番 昭和一十	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第二十五番 昭和一十
【〇七五良】※	【〇〇〇〇】柳殿※	第四十番 昭和三	○大師	昭和三	○大師	※	御山 昭和三	○大師	第七十六番 昭和一十
【〇〇〇〇】秀高※	【明石】一良※	馬屋 丑ノ年女	○大師	昭和三	○大師	※	御山 昭和三	○大師	第七十六番 昭和一十
【明石】佐助※	【住吉】与吉※	如藏 観音 昭和一十	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【片山】三良	【〇〇〇〇】兵工※	第二十七番	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【住吉】光蔵※	【〇〇〇〇】兵工※	山崎 實代三	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【石田】三代吉	【〇〇〇〇】兵工※	山本 シナ	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	大正十一	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【同人】※	【〇〇〇〇】兵工※	藤田 マツ	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	第四番 昭和一十	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	高屋 ラウ	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	千手 観音 昭和一十	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	第三番	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	御山才ノ森 宮崎 シナ	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	第四十一番 昭和一十	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	代々 小路 佐伯 シハ	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	第八十三番	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	国	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	子安 大師	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	究 品 田伊ヶ崎 中佐	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	起 々 木村 森光 柏木	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	人 〇〇 荒川 波多 原	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	第四十九番 昭和一十	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	徳山才ノ森 宮崎 シナ	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	馬頭 観音 昭和一十	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	第二十九番	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	小林 正雄	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	徳山 西村 秀久	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	第七十三番	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	徳山才ノ森 国広 シウ	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十
【〇〇〇〇】良母※	【〇〇〇〇】兵工※	亥年 女	○大師	昭和一十	○大師	※	御山 昭和一十	○大師	第九番 昭和一十

凡例

- 台石にのる徳容 単体丸彫型
- ◇ 台石にのる徳容 舟型光背形 本尊半肉彫 隆刻字
- ▽ 二枚板型の後板のみ 本尊半肉彫 氏名隆刻字
- 台石及び隆刻字
- ▲ 桐形を模してしるもの
- ※ 安山岩製。その他は花崗岩製

徳石八幡宮境内



